

静岡県図書館大会・読書活動分科会報告

平成26年12月8日(月)グランシップにて、第22回静岡県図書館大会が行われました。

今回は言語脳科学の研究者で、酒井邦嘉氏(東京大学 大学院総合文化研究科 教授)に「読書が育む脳 ～なぜ『紙の本』が人にとって必要なのか～」をテーマにお話いただきました。

まず、はじめに、言語脳科学の研究者の立場から、読書は①言葉の意味を補う「想像力」が身につく、②読書を通して思索に耽ることによって自分の言葉で「考える力」が身につく、③読書

で味わった経験を脳に刻むことができる。しかも、これらのことが知らず知らずのうちに行為れ、脳は成長し、創られていくと読書が人の脳を育むことを話されました。

さらに、普及してきた電子書籍と紙の本を比較し、手軽に読める電子書籍ではあるが、そこでは得られない紙の本の勝る点を数々挙げられ、紙の本がなくてはならないものであることを具体的に話されました。何よりも「紙の本は文字の位置情報、ページ数、重さ、手触り等々、五感に訴える力をもっている。紙の本のよさを無くした電子書籍は言わば『裸の王様』」という話は、私たちが電子書籍よりも紙の本のよさを感じてはいるものの、きちんと言葉で伝えることのできなかったもどかしさを払拭することができたお話でした。同時に心(記憶)に残る読書の大切さを強く感じました。「文明が進歩しても大切なものは簡単には凌駕されない」と言われる酒井氏の力強い言葉に安堵感をもちました。また、初めて知る私たちの脳の仕組み、脳の働きにも驚かされました。

「活字を読むことは、単に視覚的に脳にそれを入力するだけでなく、足りない情報を能動的に想像力で補い、曖昧な部分を解決しながら『自分の言葉』に置き換えるプロセスである」ことを脳の仕組み、脳の働きと共に再認識でき、2時間が短く感じた分科会となりました。

